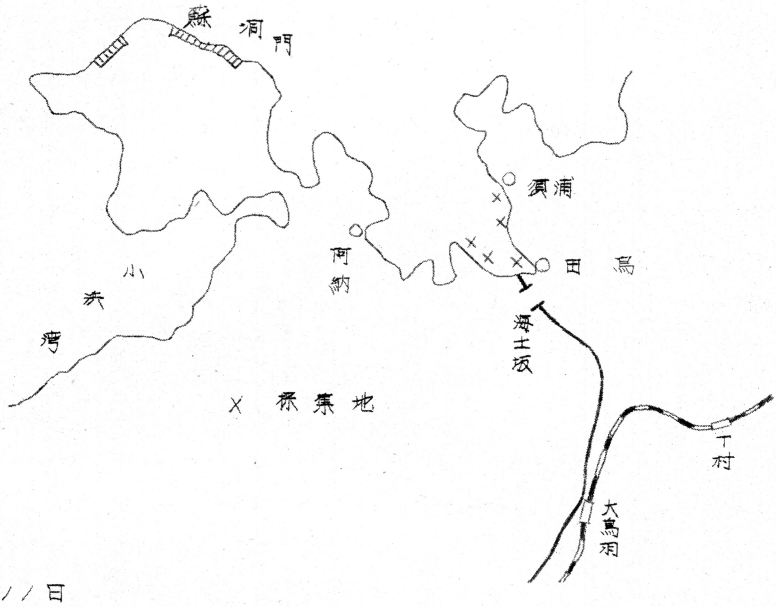
田島海産動物採集雑記



8月11日

山越えのトンネルができるまでは蓋の孤島のように思われていた田島には、未知の土地の魅力が強かった。猛暑のひる近く島羽駅に降り立つたが、あてこんでいた省営バスは暫く前に発車し、夕方近くまでは待たねばならないという不運をあきらめて、二里許りの道をてくつくことにした。

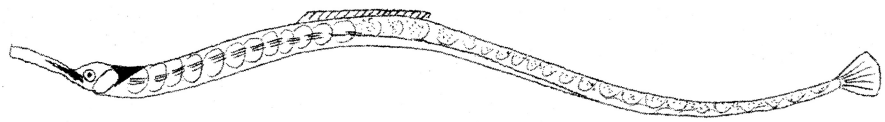
リックや胴乱の重さに肩を痛め、暑さにうだりながら、それでも植物には皆目無知の吾々動物班は、堀先生の御説明でいくらかの新知識を得て長途の無聊が慰められる。この土地にアブラギリの多いわけや、ヤマモモの木立を見ては、その実の味のよさを聞き、何か遠い土地に来たかのような錯覚を覚える。途中砂塵を巻き立て、ハイヤを駆つたアベックの某大学生らしい二人は、吾々の宿にとっくに先着して、いと必涼しく、いと必楽しげであったが無粋の一行と宿を共にして、さぞ興のさめる思いであっただろう。若い男女の逃避行にふさわしい閑寂の土地、それが田島である。

深い入海の砂浜に1.2日前に沖から引き揚げられた大謀網のガラス玉の浮きや、ロープがーぱいに放り出されている。見れば、浮きにもロープにも、その地肌がおおい隠される程にムラサキインコウやフサコケムシが着生している。しめた居ながらの採集だと胃袋、

ピンセット、ルーペを持って取り寄る。

フサコケムシをちぎり、その生え際をさがすと無数のウミグモ、ワレカラ、ヨコエビがはい出す。管瓶に同種を数十匹もおさめると、もうそれ以上の採集意欲も失われてしまう。残念なことに同種ばかりが群棲するのみである。この厄介ものをかき取っている漁夫に聞けば沖からひき揚げる時はカニもエビもヒトデも様々の動物がくっついたり住みついていたりしたが皆海に振い落したという。

磯に出て、のぞきに頼りながらの採集、これまた頗る貧弱、ヒザラガイとイトマキヒトデばかりが多い。又若狭の海では巡覧されることのないバフンウニ、ムラサキウニ、アカウニもいたるところに生棲して期待していたウミウシの類やハイドロゾアは稀であった。のぞきのガラス越に見て珍しかったのはヨウジウオの生態であった。あの者のように細い体を棒立ちにして、ウミトラノオで身体を委ねながら、さもものうそうに、水の動きに応じて動揺し、時たま目玉だけをぎょろつかせて僅かにあたりを警戒している。そうと後から手を回して、しっぽをにぎって引っぱり揚げようとしたら、不精者に似ずぴんとはねて逃げられてしまった。



ヨウジウオ

こんな磯での自力採集ではとても駄目とあきらめて、砂浜に網を繕う老翁に漁網は出ないかと聞いてみたら旧盆もま近だし、海も少々荒れるので、その積りはないという。どこの海でも思わぬ収穫を得ているのはこの網であるが他力採集も又断念せざるを得なかった。

夜磯に出て見たら、ウミホタルが明滅するのみの暗い海で沖にはいか釣りの灯も見えない。そっと船着場の端のいけすをいたずら半分でたぐり寄せて見たら、中から猫の怒気に似た音を立てる動物にたまげて手を放してしまった。恐る恐る再び引き揚げて見たらアブリイカであった。懐中電灯の下でフッ　という音の原因を検べて見たら、空気を外套腔に一ぱい吸い込んでそれを勢よくはき出す音だった。

8月12日

朝から薄曇りで涼しい。海に入れば、へそぎりで寒さに鳥肌がたつ。入江の右の涯にそって採集を続けるが昨日に変らぬ平凡さ。

人のよさそうな中年の漁師が一人でしきりと磯で砂や小石を掘り返してはゴカイをとっている　この辺の漁師はゴカイを餌にしての釣も余りしなかったが、近頃関西方面の釣師がこの餌でススキを沢山釣り上げていくので、一度試して見るのだという。暫く手を休めて一時あれこれと話して見ると、聞けば聞く程、伸気な生活振りにあきれる。ここでは昔

ながらの漁法で漁獲高が一向に上らないという。たゞ一人この部落の若い男が富山に出稼ぎして、新漁法を習いこゝ一、二年に他の人々の何倍もの収益をあげているという。南西の釣師に刺激され、富山の漁法が導入されて、スプートニクの時代に新く目覚めようとするのが平和郷田島である。

沖合いから拡声機の音も賑やかにすべり込んだ発動機船がある。船着場には村の女連中が一ぱいにざるやてごを持って集まって来る。船から降ろされるすいか、なす、きゅうりが飛ぶように売れる。二、三日後の盆の御馳走の準備だそうな。あちらこちらに作れば結構作れる畑を持ちながら粟や豆のみを栽培して、食膳の野菜はいつも小浜から補給されるという。何と励みのないおだやかな土地であろうか。

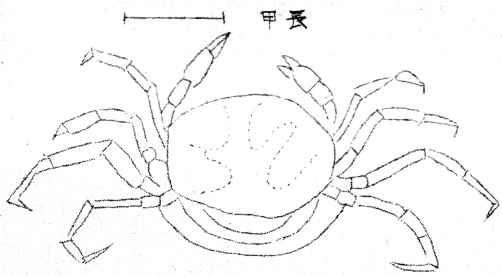
盆の食膳を賑わす漁法もふるっている。小舟に若者二人がのって、舟から巾一間程の帯状の網を海中に環状におろしていく。やがて長い竹竿で水面をたゝき、次いでやおら網を引き締めていってその中の何匹かの魚をとらえるのである。まるで南方の土人のような幼稚な漁獲法がいまだに残っているのである。舟の底にはアイナメメイタガレイ、ボラ、アブリイカ数匹が転がっていた。

渥の鼻を廻って次の部落の磯に出た。こゝでも盆準備に忙しい。折よくイガイ取りの舟が蘇洞門から二、三ぱい帰って来たのに出逢う。見れば手ぐり舟一ぱいのイガイである。それも一抱えもある貝と貝のかたまりがうず高い。聞けば、海中に潜って、貝の大集団にたがねをうち込んではとるのだという。国定公園若狭の絶景蘇洞門の海の底のイガイの大群落の壮観がしのばれる。

イガイは見るたびに珍奇で呼び名も又様々であるが意味するところは一つである。一番おだやかな呼び名がニタリガイ（似たり貝）ではなかろうか。

ことあろうにこの貝を唯一の住家とするカニがある。オオシロピンノといろいとも色白なハンサム？　堅城鉄壁しかも人の言うニタリガイに酔生夢死するこのかにこそは何とエロチックなやつであろう。漁師にたのんで偉大なものをよって幾つも幾つも貰い受けた。フオルマリン浸けにしておけば旬日で貝中の彩色はうすれ、興も又うすれてしまうことであろう。オオシロピンノ数匹は貴重品扱いにして持ち帰ることにした。

意外の収獲不足をかこつて、五十嵐先生は海を断念して、宿の前を流れる巾一間程の川に入っていかれた。ゴリ、ビリンコ、カマキリ、タナゴ等数種を採集、それに海に近いこんな小川でハコネサンショウウオも数匹集めて来られた。山奥い渓流ではかりすむと思っていたサンショウウオがこんなところにもおるのかといままでの認識不足が恥じられた。現山から帰って来た植物班から大きなモリアオガエル一匹を貰い受けた



おおしろぴんの

のは最大の喜びであった．

8月13日．

トラックに便乗して帰盛につく．胴乱と背嚢はすこぶる軽い．二度と田鳥を訪れる意欲はあのアベツク以外はあるまい．三日間の採集品を整理したら次のとおりであった．

ハコネサンショウウオ，モリアオガエル．
アカイタボヤ，　キクタボヤ，
マナマコ，　バフンウニ，　ムラサキウニ，　アカウニ，
ヤツデヒトデ，　イトマキヒトデ，　ヌノメヒトデ，
イワガニ，　イシガニ，　アカテガニ，　オオシロピンノ．
ヨコエビ，　ウミグモ，　フレカラ，
ムカデメリベ，　アオウミウシ，　クロヘリアメフラシ
ケハダヒザラガイ，　ヤスリヒザラガイ，　ウスヒザラガイ．
ムラサキインコウ，　イタヤガイ，
コブコケムシ，　フサコケムシ，
ウロコムシ，　クマノアシツキ，　フサゴカイ
ウスヒラムシ，　ホシムシ
モエギイソギンチャク　　ウミシバ

（小林貞七記）

敦賀市黒河谷植物調査報告

昭和32年6月敦賀市の堀氏外20余名の同好の方と，敦賀市黒河谷の植物を調査する機械を得た．午前9時国有林事務所に集合，午前中は天候に恵れて，採集や観察をする事が出来たが，午后は雨になり，採集も充分出来ず，午后4時事務所に帰り散会した．その時の採集した植物は次の如くである．（採集順）

昭和32．6．　　黒河谷採集目録

オホバニガナ，シロバナオホバニガナ，アズマナルコスゲ，ゴウソ，ハリガネスゲ，トボシカラ，ヌカボ，シラキ，ツルウメモドキ，ツリガネニンジン，コマユミ，レンゲツツジ，ツクバネウツギ，ガマズミ，オウフジイバラ，ヨツバムグラ，タチイヌノフグリ，ミゾイチゴツナギ，タチカモジグサ，ナツハゼ，ミツバツチグリ，ナギナタガヤ，オラ